

子どもの写真に見る大人の眼(3)

—子どもに託されたものから—

荒川 志津代

カメラマン長倉洋海は、一九八九年エル・サルバドルに入学しようとした時、ジャーナリストであることを警戒され、入国を拒否された。仕方なく陸路で、グアテマラからバスでの入国を目指した。その時のエピソードである。「ボクは戦争を撮る気はないんです。ほら、子どもを撮っているんです」と言って、自分が撮った子どものポストカードを、国境のイミグレーション・オフィスの係官に見せた。

すると、厳しい顔付きだった係官の表情が急になごんで、「七日間有効」の入国スタンプを押してくれた¹⁾という。

ここでの係官にとっての子どもという記号の意味は、多くの人に共有されているものであり、長倉はそれを利用したのである。²⁾今回は、広く人々の目に触れる写真から、子どもの写真のメッセージ性や、象徴あるいは記号としての子どもについて考えてみ

たい。

一・無心・純真・天真爛漫

長倉が利用した子どもの記号とは、無心・純真・天真爛漫のようなものであったといえるだろう。現在市販されている子どもの写真集の多くが、子どもをこのように捕えているように見える。小さな身の丈で相対的に大きな頭部といった体型だけで、子どもは大人との異質性を示してはいる。しかしカメラマンが捕獲したのは、大人の笑みとは何か異なる彼らの笑顔、単に大きいと形容するだけでは不十分なまっすぐな瞳、大人になつては滅多にしない表情やしぐさ等の総体である。

江戸末期、カメラが日本に入った頃の子どもの写真は、こうではなかった。島津斉彬撮影と伝えられてきた「姫三人」にしろ、幕末の写真師上野彦馬が撮った子どもにしろ、髪型や衣服にある種の徴をも

つ場合はあつたにせよ、その意味を理解しないものにとつては、彼らはただの小さい人であるように見える。大正期の富裕層の子どもたちは、特別な子どもらしい衣装や小道具に囲まれて写真撮影されていた。それらによつて子どもらしさを演出されていたが、それら道具立てを剥がしてしまえば、ただの小さな人だった。

躍動する瞬間や、「子どもらしい」といわれる表情を熱心に捕獲し出したのは、昭和初期（写真1）であるように思われる。小道具が無くても、「裸ん坊の子ども」が「子どもらしく」見えるような映像が現れ出した。カメラや撮影技術の進歩が影響しているとともに、捕獲する眼自体が変わつてきたのだと考えられる。そして戦後、「おてんば」や「ガキ大将」を含め、「無邪気な子ども」が、子ども写真の大きな部分を占めている。

現在、子どもの映像は新たな捕えられ方もされつ

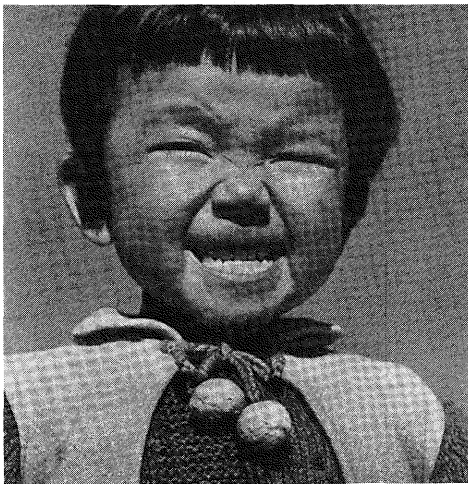
つある。しかし近代的孩子も観の反映として、映像として明確に示されるようになったこの像は、今でも大きな流れとして息づいている。

二．悲惨さの象徴と告発

一方子どもは、しばしば、飢餓や災難、戦争といった場面で、被写体になることも多かった。例えばジュリッツァー賞を取った「ハゲワシと少女」に代表されるようなものである。これは、ハゲワシが飢えて瀕死の少女を狙っているもので、まずは子どもを救うべきであった等、カメラマンが非難もされた。目を覆いたくなるような、悲惨さをそのままに伝える写真である。日本における太平洋戦争下の写真集でも、子どもを犠牲者として位置つけた悲惨な写真が多く収録されている。世界中を見れば、有名なものだけでも、子どもを被写体としたものが相当数ある。それら多くの戦争写真の中には、悲惨さを

伝えるだけに止まらず、戦いやそこでの非道な行為への告発というメッセージを強力に感じさせるものがある。

例えば中村梧郎の、ベトナム戦争での「作戦で枯れたマングロープ林とフン少年」の写真³⁾である。枯れた根元が立ち並ぶ林に、ぽつんと裸の少年が、泥



▲写真1 『子供の写し方』
(石津良介著、アルス、昭和12年発行)より

の中に立っている。この写真は、子どもがいること
によって、枯れ木だけとは異なる印象を与えてい
る。このような状況の中で、生き続けなければなら
ないことの悲惨さを、表現しているようにも見え
る。また写真だけを見れば、枯れ木の未来における
再生を、示唆しているようにも取れる。しかし次の
ページには、十九年後のフン青年の写真がある。

「全身のマヒ症状が進んで会話も困難になつてい
た」と説明がついている。作戦はその時被害を与え
ただけでなく、そこに生活し続けざるを得なかつた
人々に、その後も影響をもたらし続けたのである。
それを知ってもう一度あの写真を見れば、林の中の
フン少年は、あの作戦への告発者である。

子どもは無邪気で罪が無いという前提ゆえに、ま
た私たちが彼らに未来を託しているゆえに、悲惨さ
の象徴や告発者として、子どもに強いメッセージ性
が負わされるのだろうか。

三．無邪気と悲惨の反転

イメージとしての子どもの無邪気さは、彼らに告
発者としての位置を与える一方で、事態の認識を軟
化させるように働くこともある。

例えば、戦争などの悲惨な状況であるにも拘わら
ず、明るい子どもの姿が撮られることも多い。難民
キャンプなどで、精一杯元気に明るく笑っている子
ども、といった写し方である。このような場合、写
真を見る私たちは、写真の背後にある悲惨な状況
を、ある程度理解している。従つてこのような明る
い写真からも、裏返しとしての悲惨さの告発を感じ
ることもある。だがそれよりも、苛酷な状況の中の
明るさに、救われたりもするのではないだろう
か。

報道写真となると、時として安易に、子どものそ
んなアンビバレントな記号が利用されもする。最近

のイラクからは、可憐な少女と兵士という不釣り合いな二人の写真（写真2）が届いた。子どもが居合わせる事が当然とは思われない場面に、通常の様子の子どもがいることは、たとえ写真だけでもニュースではある。だがこの取り合わせが、結果的に、どんな印象を与えることになるのだろうか。

「メディア戦争だった湾岸戦争」という文の中で新藤健一は、「発表された写真は、ウツカリするとプロパガンダに利用されかねない」と警告する。戦いの中の子どもは、悲惨さを象徴するとともに、希望を託される部分もあり、その両面をもつ子どもの強力なメッセージ性、記号性は、事態への印象を、随分と変化させるものだと思うされる。

四・平和・可能性・未来

子ども写真は、広告の中でもしばしば使われる。子ども写真がどのような商品で使われているかを、



▲写真2 The Japan Times(2005年4月9日)より

一九四九年から一九九五年までの新聞広告の中で、カウントしてみたことがある⁵⁾。結果は、子どもはほとんどの商品で使われており、それぞれの時代の新しい商品に、ほとんど必ず登場するというものだった。そこでは子ども写真は、子ども向け商品や家族向け商品ということをアピールするためだけでなく、新しい商品が登場するたびに、何らかのイメージを喚起するために使われているといえた。そしてその多くは、未来や可能性や平和といったイメージである。

例えば、鮮烈な印象を残したものに、「じぶん新発見」のコピーでも有名になった、幼児水泳を撮った西武デパートの広告（一九八〇年、ポスター及び新聞）がある。みずみずしい生命力を感じさせ、「テーマ」ではなく、「感動」を表現していた。これから何かが起こるぞという予感を感じさせるような写真だった。また子どもは、イメージのソフト化

のためにも使われていた。例えば通信事業の広告（一九八二、日本通信工業）に登場したりした。「少年は一本の針金に乗って飛ぶことができる」というコピーがついていたが、これは、子どもに可能性を託すという子ども観を背景にしていると言えるだろう。

一九七〇年代以降、子どもが最も安定的に広告に使われる領域の一つが、家や土地であった。今年二〇〇五年四月分の新聞広告でも、家の広告に最も多く子どもの姿が見られた。不動産及び金融・保険さらに車の広告に、子どもはしばしば家族の一員として登場するが、彼らは商品をソフト化する役目とともに、安定・未来といったイメージを負わされているといえるだろう。さらに、平和な家族というイメージとも結びついていると思われる。写真3は、公共広告機構の広告（一部分）である。家族機能の崩壊が指摘されている今、これらの映像は、ありた

い家族の夢として、より機能すると言ったら皮肉だろうか。

以上、四つの観点から、子どもに託されてしまった徴、記号を見てきた。子どもは、時代や社会の中で、安易に徴づけられ、利用されているようにも見える。私たちは、アプリオリな子どものイメージに、



▲写真3 AC公共広告機構
2005年6月 新聞広告より

もう少し用心深くなる必要があるのかもしれない。

(名古屋女子大学)

引用及び参考文献

- 1) 長倉洋海『フォト・ジャーナリストの眼』(岩波書店、一九九二、二一四頁)
- 2) 山下恒男・荒川志津代『戦争と子ども』写真についての一考察』『茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学、芸術)』第46号、一九九七
- 3) 中村梧郎『グラフィックレポート戦場の枯れ葉剤』(岩波書店、一九九五)、一八一―一九頁
- 4) 『報道されなかった湾岸戦争』写真集編集委員会編『報道されなかった湾岸戦争』(影書房、一九九二、二頁)
- 5) 荒川志津代・山下恒男『広告・宣伝写真の中の子ども(2)』『茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学、芸術)』第45号、一九九六